鹿屋体育大学学術情報リポジトリ
National Institute of Fitness and Sports in Kanoya Repository

Title	斎藤新太郎の廻国修行と大村藩：『諸州脩行英名錄』（弘化4―嘉永2年）ならびに『脩行中諸藩芳名録』（嘉永2年）の史料批判を通して
Author(s)	田端　真弓, 山田　理恵
Citation	研究論文集－教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集－, 5(1)
Issue Date	2011-10
URL	http://repo.lib.nifs-k.ac.jp/handle/123456789/1487

国立大学法人　鹿屋体育大学
National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

斎藤新太郎の廻国修行と大村藩：

『諸州脩行英名錄』（弘化4―嘉永2年）ならびに『脩行中諸藩芳名録』（嘉永2年）の史料批判を通して

A study of the significance of historical sources on *Saito Shintaro's* ascetic practices around the feudal domains: With reference to historical fact in Ohmura

田端真弓[1)]，山田理恵[2)]

Mayumi TABATA[1)] , Rie YAMADA[2)]

Abstract

The purpose of this study is to clarify *Saito Shintaro's* (1828–1888) ascetic practices focusing on the Ohmura domain. *Shintaro* was the eldest son of *Saito Yakuro* (1798–1871), a well-known swordsmanship instructor at the end of the Tokugawa period. *Yakuro* had established the *Rempeikan* (*dojo*), and *Shintaro* inherited it. He traveled to various feudal domains from 1847 to 1849. Two historical sources, *Shoshu Shugyo Eimeiro-ku* and *Shugyo-chu Shohan Houmei-roku*, contain records of his travels. The significance of these sources has not yet been examined. This paper examines the reliability of these sources and presents the following conclusions.

(1) These sources indicate the places (feudal domains) and the dates of the visit made by *Shintaro*. In particular, most of the records of Kyushu appear in *Houmei-roku*.

(2) The first area visited by him was the Koga domain. The northernmost domain was Matsumae and the southernmost was Hyuga. The Hirado domain and Tsushima domain were the westernmost places.

(3) He participated in matches more actively in the north of Kyushu than he did in other districts.

(4) His ascetic practices became the turning point in the transformation of the school (*ryuha*) of swordsmanship in Ohmura.

Key words： *musha-shugyo, taryu-jiai* (inter-school matches), *eimei-roku, Rempeikan*, Ohmura domain

キーワード： 武者修行　他流試合　英名録　練兵館　大村藩

1．はじめに

幕藩体制の安定にともない泰平の世の中を迎えた江戸時代中期，武芸における他流試合が遺恨を生じるものとして禁止され，室町時代末期から江戸時代初期にかけて行われてきた廻国修行は衰退し，形の修練を中心とした稽古がなされていた（中林, 1994, pp.67-70）。しかし，江戸後期になると神道無念流や直心影流，北辰一刀流などをはじめとする竹刀打込稽古を主とした流派が勢力を広げ，他流試合が実施されるようになった。そして天保期以降，他流試合のために諸藩を巡る廻国修行は再び高まりをみせたのである（下川，1925, pp.300-301; 渡邉, 1967, pp.12-13）。

一般に「英名録」と称される小帳簿類には，渡

1）鹿屋体育大学大学院体育学研究科・日本学術振興会特別研究員
Graduate School of Physical Education, National Institute of Fitness and Sports in Kanoya,
Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science
2）鹿屋体育大学体育学部
Faculty of Physical Education, National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

邉が示しているように修行者が廻国修行において携帯・持参し，訪問した道場における道場主や門人名が記載された「廻国修行英名録」，そして廻国修行を記録するために道場に備えられた「来訪英名録」（渡邉, 1980, pp.180-190）の他に，榎本が紹介したような他流試合のできる師家を書き上げた『弘化5年2月諸国剣家姓名録』などがあげられる（榎本, 1983, p.35）。「廻国修行英名録」の中で，最も古いとされている史料は，長尾が紹介した寛政10（1798）年の『剣術修行帳』（長尾, 1997, pp.2-3）で，この類の英名録はこれまでにも他流試合や廻国修行の実態を知る上で貴重な史料とされてきた。長尾は，これらを用いて廻国修行の修行経路や方法が嘉永期頃にはほぼ確立されていたと述べている（長尾, 1993, p.41）。また，文政期には，西南地方の村落においても地方独自の流派による他流試合がみられるようになり，九州近隣の地域では他流試合が活性化していたこと，またその活性化は他の地方よりも先進的であったことを榎本が明らかにしている（榎本, 1983, pp.39-41; 榎本, 1987, p.14）。

幕末期に廻国修行をした剣術家の一人である斎藤新太郎（文政11－明治21年：1828－1888年）（以下，「新太郎」と略す）は，江戸三大道場の一つとされる練兵館の師範・斎藤弥九郎（寛政10－明治4年：1798－1871年）（以下，「弥九郎」と略す）の長男である。新太郎が武者修行として諸国を巡ったことはこれまでにも明らかにされており（横山, 1943, pp.350-354），その時期は嘉永年間であることが示されてきた（中村，1994, pp.148-149; 富永, 1996, p.311）[注1)]。新太郎の三男である斎藤福松（以下，「福松」と略す）によれば新太郎の修行は諸藩に及ぶもので，弘化4（1847）年から嘉永2（1849）年にかけて行われたことが述べられている（斎藤, 1939, pp.63-64）。福松は廻国修行の期日と訪問地について網羅しているが，訪問先の流派や師家など新太郎の廻国修行そのものの具体的な検討を行うまでには至っていない。木村紀八郎は弥九郎の人物像を記す過程で新太郎の修行に触れ，訪問地や門人の一部について説明を加えているが（木村, 2001, pp.204-225），訪問地や期日すべてについて明らかにされているわけではない。小谷は斎藤新太郎の廻国修行を記したと考えられる史料『諸州脩行英名錄 弘化四丁未年四月日』（以下「『英名錄』」と略す），『脩行中諸藩芳名録 嘉永二己酉年』（以下「『芳名録』」と略す）を紹介して，訪問地とみられる場所や流派などについて明らかにし，一部の訪問地について考察を加えているが，史料批判の過程を経たものではない（小谷, 2009, pp.93-87）。

このように，これまでの研究ではこれらの史料に対する史料批判を経た検証がなされておらず，史料そのものを検討するという過程が踏まれていない。したがって，史料の信憑性について触れ，二つの史料が如何なることを示唆しているのか，改めて検討しなければならない。

そこで本研究は大村藩を中心に据えて『英名錄』[注2)]，『芳名録』[注3)]の詳細な史料的価値の検討を加え，これらの史料から読み取ることができる新太郎の廻国修行の実態について明らかにすることを目的とする。

そのために，まず，新太郎の廻国修行前後の剣術稽古について触れ，それぞれの史料形態を明確にし，史料批判の方法として大村藩を取り上げ，大村藩関連の記載事項から両史料が新太郎の廻国修行を示すための妥当な史料であるか否かについて述べる。そして，嘉永7年に大村藩は斎藤新太郎の弟，歓之助を招聘するという着眼点から大村藩を中心にみた新太郎廻国修行について検討した。

２．斎藤新太郎と練兵館

神道無念流は，福井兵右衛門を流祖とする剣術流派で幕末期には最も弘流した流派の一つであった。同流の戸賀崎熊太郎暉芳は，16歳で江戸に出向き兵右衛門の門下となり，兵右衛門の跡を継ぐこととなった。彼は21歳で印可を授かり，文化元年頃，7年にわたる廻国修行を経験している。彼

の帰郷に際して道場の後任を託されたのは，門弟の岡田十松吉利である。十松は撃剣館と称する道場で門弟への剣術指南を行った。水戸藩士藤田東湖や伊豆韮山代官の江川英龍などが十松の門弟として名を連ね，斎藤弥九郎もその一人であった（全日本剣道連盟, 2003, p.259）。弥九郎は寛政 10 年 1 月 13 日，越中国の由緒ある家柄に生まれたが，帰農したために農民身分の所出であった。

弥九郎は文化 9（1812）年江戸に出向き，撃剣館へ入門，文政 9 年，飯田町へ剣術道場のちに江戸三大道場の一つとなる練兵館を開いた。文政 11 年 7 月生まれの新太郎は，弥九郎（篤信斎）の長男で，龍善という諱を持つ。「父篤信斎の厳格な訓育を受け，武道は勿論各般の学芸に秀で，殊に書は渡邊崋山に師事し，詩もよくすれば，書にも堪能」な人物であった（斎藤，1939, p.63）。彼は二代目弥九郎として練兵館を継承し，弘化 2 年 7 月江川英龍の下へ入門して砲術などを学んだ。同 4 年 2 月 8 日から 3 月 28 日には江戸三大道場の桃井道場・千葉道場など江戸の 10 道場と他流試合を行った。『都下諸流試合姓名帳 弘化四丁未年二月』（筆者不詳，1847）[注4]によれば，このとき練兵館から参加した門人は 19 名で，新太郎の手合わせは練兵館門人の中で最も多く，彼が門人らを率いて行ったものである。

また，嘉永 4 年には練兵館門人らとともに佐倉藩へ（渡邉, 1967, p.20），嘉永 5 年には長州藩へと足を運び（木村, 1990, p.40-42），試合と稽古に遊歴したとみられる。このように新太郎は練兵館門人らを伴って，練兵館のみならず他藩あるいは他の道場においても剣術稽古を重ねていた。

３．史料批判および史料形態

本研究で対象としている史料は斎藤家より氷見市教育委員会生涯学習課に寄贈された原典史料である。これまでに前述の木村が『英名錄』は「同一人の筆により清書」されたであろうと若干の考察を加えているが（木村, 2001, p.212），明確な史料批判はなされておらず，史料形態についても紹介されていない。したがって本項では以下の四つの観点から史料そのものの価値に関する考察を試みた。

（１）表紙・序文・花押の有無

『英名錄』『芳名録』は和紙に記された手書きの文書で，その表題にはそれぞれ「弘化四丁未年四月日　諸州脩行英名錄　練兵館社」，「嘉永二己酉年　脩行中諸藩芳名録　練兵館社」と記されている。一般的に，「英名録」は「巻首に師家の流名・署名・印鑑・本人の姓名，先学などの序文をのせ，次々に歴訪する道場で道場主・門人の署名」を受けることが一般的であった（渡邉, 1980, pp.180-190）。

「弘化四丁未年四月日　諸州脩行英名錄　練兵館社」と記された『英名錄』は，縦 27cm，横 10cm 程，袋綴じ和紙に書かれた全 55 丁[注5]の小帳簿である。序文や修行者新太郎の署名あるいは押印は見られないが，訪問先の藩，流派名，師範名，門人名，日付などが記されており，その記載内容は英名錄の形式をもつ史料である。

『芳名録』は『英名錄』同様に袋綴じ和紙全 61 丁[注6]，縦 26cm，横 10cm 程のもので，前述の通り「嘉永二己酉年　脩行中諸藩芳名録　練兵館社」との表題，「江戸　齋藤弥九郎門人　齋藤新太郎」という奥書を有している。序文はないが，新太郎の名が記され，訪問先の藩・流派名・師範名・門人名・日付が載せられている。

（２）史料欠落，落丁

『英名錄』から正確に読み取れる最初の訪問地は弘化 4 年 4 月 13 日の笠間藩，史料の最後に記された訪問地は嘉永 2 年 3 月 25 日の豊後岡藩である（練兵館, 1847-1849, 1 オ-1 ウ; 54 オ-55 オ）。笠間藩から岡藩に至るまで，先に示した記載項目に準じて記載されている。ところが，弘化 4 年 4 月 13 日笠間藩以前に 10 名の門人の氏名が記されており，この 10 名については，藩，流派，師範などの記載がみられない。笠間藩以前の史料は欠落したものとみられる。この 10 名のうち，岡野八百喜・三浦次郎吉・山崎恭助（ママ）・進藤登蔵・千賀牧太の 5

名は長尾による『宮崎長兵衛武術英名録』の「古河藩　東軍流　片山勇次郎」の門人名と一致をみることから（長尾, 1993, p.36），『英名錄』の記載は，古河藩から始まっていることが窺える。同様に，嘉永 2 年 3 月 25 日岡藩の門人に続いて，臼杵藩，直心影流の門人名等 20 名が記されているが（練兵館, 1847-1849, 55 オ-55 ウ）[28]，期日が記載されていない[注7]。

一方，『芳名録』は嘉永 2 年 4 月 18 日日向に始まり，嘉永 2 年 9 月 20 日膳所藩で記述を終えており（練兵館, 1849,1 オ, 60 ウ-61 オ），史料の欠落，落丁はないものとみられる。

（3）史料記載者，記載時期

『英名錄』『芳名録』は前述のように序文がなく，記載内容も流派や師範名などしか書かれていないため多くを語らない。二つの史料の書き手もまた現段階では明確にならない。二つの史料を比較したときの大きな相違点は，『英名錄』が一定の筆跡で淡々と書かれていることに対し，『芳名録』はさまざまな文字のくずしをみる点である。さらにもう 1 点は『芳名録』には訪問先とみられる道場主の押印が多数みられることが特徴的である。すなわち，これらの相違点から浮かび上がってくることは『芳名録』は修行者が持参し，各地で押印を受けたものではないかということ，『英名錄』は時間的な余裕を持って修行後にまとめて書かれたものではないかということ，『英名錄』が一人の記録者であることに対し，『芳名録』は複数の手にかかったものではないかということである。

（4）史料の信憑性について

次にこの二つの史料の信憑性という観点から，虚偽や偽作の可能性があるか否かについて検討した。『芳名録』に記された大村藩前後の箇所を翻刻したものが表 1 である。田端ら（2011）にあるように，長井兵庫，緒方半蔵，浅田千代治，小佐々千三郎は『九葉實録補欠草稿弐』に記された人物であり，特に長井は嘉永 7 年 7 月に「無念流取立助」へ任命される（田端ら,2011, pp.8-9）。その後安政 4 年閏 5 月には「無念流取立」となるのである。長井の名は『新撰士系録』にもみられる。原口門人では『新撰士系録』において名称はみつけることができるが，人物を断定するには乏しい場合を除いて，吉川や原口がこの時期の藩士とみられる。同様に森重門人の永野清左衛門，内海門人の多くが『新撰士系録』にみられる同時期の大村藩士で，原口盛衛師範もまた『新撰士系録』にみられ，さらに弘化 3 年正月「原口盛衛軍助ノ更名累年剣術ヲ勉ム　廩禄六石ヲ加フ」（九葉巻之五十三，弘化三年正月十一日）とあることから当時の大村藩の剣術家であったことがうかがえる。

また，大村藩では「藩士の剣術を善くする者をして新太郎と技を較せしむ」として斎藤新太郎が来藩し試合を行ったことが述べられている（山路, 1920, p.35）。表 1 に示したように，5 月 6 日，5 月 24～27 日ともに「試合」の記載がみられる。このように『芳名録』を，大村藩を中心に考察するとき，この時期の藩士らの姓名が多く記載されていること，試合を行ったと考えられること，これらの点において『芳名録』の虚偽・偽作の可能性は低いと判断できる。

そして，新太郎の廻国修行に関する史料が『英名錄』『芳名録』と分割されている理由は定かではないが，このように訪問先で押印を受けたとみられる『芳名録』の初出の訪問地が嘉永 2 年 4 月の日向であることと『英名錄』の最終訪問地が嘉永 2 年の 3 月，豊後であること，これらの日付や訪問経路の点から疑問点が生じないため，経路という点でみたとき『英名錄』の偽作の可能性は低いと判断される。よってこれらの史料は一連の新太郎の修行訪問地を示した史料とみられ，新太郎の修行記録は来訪修行の記録ではなく，訪問修行の記録であることが言及される。また，大村藩の記述に対する信憑性から，比較的信頼され得る史料であると判断した。そして『芳名録』は主として九州における訪問地を示した史料である。

４．記載内容の検討

上述のような大村藩を中心とした史料的価値に関する検討から二つの史料に対して一定の信憑性をみることができた。そこで，次に内容の考察を行った。ここでは訪問経路の詳細については対象とすることを避けるが，新太郎が訪問したときの経路の概要を示せば，弘化４年４月頃下総古河藩から常陸，下野へと向かい[注8)]，陸奥，出羽など現在の東北地方，そして北陸を歴訪した後に，東海道を西へ進んだとみられる。大坂を経た後は，現在の四国・中国地方を巡り，嘉永２年３月に豊前・豊後へと入った。ここまでが『英名錄』にみられる記録である。一方，『芳名録』は嘉永２年４月日向に始まり，肥後，筑後，肥前，長崎と続き，その記録は長州，津和野，京都で終わる。これらの訪問地において如何なることが看取されるか，次の３つの観点，(1)「試合」の記述の有無，(2)他藩に出向きその地で門人となっている者について，(3) 各訪問地における押印の有無から進めた。

（１）「試合」の記述の有無

ここでは史料内に記された「試合」の記述について検討したい。二つの史料には上述した大村藩のように「試合」の記載がみられる訪問地とみられないものが存在している。天保期以降他流試合は活性化し，各藩で他流試合が実施されることや藩士が修行に出かけることは例外ではなかった。しかし，岩国藩の事例にあるようにすべての流派においてそれが認められたわけではなく（和田，1990, pp.49-50），他流試合への抵抗があったとみられる。また嘉永６年以降修行に出かけていた牟田の日記からは「一躰當所ハ江戸留守居より之御申入無之ば，御手合申事相成不申國方(法)ニ相成」，「節角遠路之御尋ニ而御座候得共，御留守居筋より御申入無之故，六ヶ敷有之，御気之毒ながら御斷申と之事也。一躰先日も四人連ニ而齋藤彌九郎より添書有之候得共，内分ニ而も出来兼候譯合ニ付，方(旁)々以事故殘念ながらと申歸也」（森ほか，1974, pp.305-307）とあるように、例え斎藤家の「添書」があったとしても，手続きをとった上で許可を受けなければならないことを理由に，手合を断ると述べている藩もある。他流試合はすべての藩において許されたのではなく，禁じられていたり，師範がその申し出を断ったりするなどその状況は各藩それぞれであったと考えられる。天保期から次第に他流試合が認められ，ひらかれつつあったが，このような社会背景が弘化期に出立した新太郎を取り巻いていたのである。江戸の三大道場の練兵館門人といえども，新太郎がすべての藩において順調に試合や稽古を重ねたとは考えられない。

それでは「試合」が語る実態とは如何なるものであろうか。ここでも大村藩を事例に挙げてみると，大村藩では試合を行っていたとみられ，「試合」の記載のある訪問地の一部には「於加藤善右衛門道場試合」「鹿島道場ニ而試合」というように稽古場を明記している場合がある。同様に考察していくと，「試合」の記載がみられない訪問地には道場あるいは稽古場の記載はひとつもみられない。すなわち，新太郎らは「試合」の記載がない訪問地では試合ができなかったあるいはその申し出を断られた可能性があり，記載のある場所では試合を行うことができたとみるべきである。

「試合」が記載された訪問地については表２中の試合欄に〇を付した。上記の点において『英名錄』は試合の実施を認める史料としては極めて曖昧であり，唯一美作・伊予でその記述がみられる。『芳名録』では多数みられるため列挙しないが，そのほとんどが九州北部に集中しているのである。これらのことから推察される実態は，新太郎は九州北部では試合を行うことができたということである。そして同時に『芳名録』にのみに焦点をあてて，訪問地の流派が神道無念流に限定されていない記載内容を汲んだとき，新太郎は明らかに他流試合をめざして修行に出立したとみられるのである。

（２）他藩へ出向きその地で門人となっている者

大村藩士荘勇雄は，嘉永2年藩命により江戸に至り，練兵館に入門した。一方，長尾が示した嘉永3年の史料では「神道無念流　齋藤彌九郎門人…（略）…　大村　荘佳奈江」と記されており，荘が練兵館門人となっていることがうかがえる（長尾, 1993, p.30）。このように門人名とともに記されているものは特記事項であり，その人物の身分や出身を示し，当該門下生としての情報を与えていると考えられる。『芳名録』においてもこのような記述スタイルが多々みられ，史料を丹念に検討していくと，他藩の藩士が含まれている箇所がある。この記載がみられる訪問地については表2の他藩士欄に〇で示した。そのうち柳河(ママ)藩の師家・大石七太夫の門人に顕著で，ここには，長州，肥前大和，飫肥，和泉，蓮池の者たちの名前が記されている。そして小城藩新陰流鍋島邦衛の門人には「久留米藩(ママ)朝山一伝流兼庄藤兵衛」，「柳川大石新蔭流兼西田勝馬」，「久留米藩新陰流兼松崎大蔵」（練兵館, 1849, 19オ）の3名が連ねられている。すなわち，各藩への藩士らの出入りがあり，小城藩のように他藩へ出向いて門人となり二流以上の流派を学んでいた者が確認されるのである。このようなことが小城，柳川，久留米などにおいて認められていたとみることができる。

（3）各訪問地における押印の有無

第3章第3節の史料記載者，記載時期で示したように，『芳名録』における訪問地では多数の押印を受けている。これらの印影からは流派の押印と師範家の押印とみられる。押印のみられた訪問地について，流派の印，師範家の印，これらを合わせた押印の数を表2の押印欄に示した。押印の数やこの印影がいかなることを示唆しているのか，その理由は明確にならないが，このような他流試合の場合，少なくとも流派と師範家の印をそれぞれ一つずつ，その双方を受けることが当時の剣術家たちの共通認識になりつつあったことがうかがえる。ただし，これについては今後，詳細な検討が必要である。

5．大村藩とその周辺の訪問地における記述

嘉永2年閏4月久留米藩で試合を終えた新太郎は対馬へと渡り，その後肥前蓮池・佐嘉(ママ)・小城・鹿島に至った。大村藩への訪問はその後のことである（練兵館, 1849, 21ウ-27オ）。大村藩は嘉永7年5月（安政元年改元前）に新太郎の弟・歓之助を招聘し，安政2年には藩主流の剣術流派を神道無念流へと改変させた（田端ら, 2011, pp.8-9）。嘉永7年から安政2年（1855）にかけたこの経過は，大村藩の藩主らが歓之助を獲得し，神道無念流を積極的に採用しようとしたことによるものであったが，その発端は嘉永2年5月の新太郎の廻国修行にさかのぼる。新太郎が大村藩を訪れた際，大村藩士の剣術に優れた者は「一人の善く之に敵する無し」（山路, 1920, p.35）のように新太郎一行に力が及ばなかった。これを受けて同年8月，荘は藩主・執政主導のもと練兵館に入門し，歓之助は江戸にて馬廻となり大村藩へ召し抱えられるに至ったのである。このように大村藩にとって，新太郎の修行とその試合は藩士を練兵館に入門させる，また，藩主流の剣術流派を神道無念流にさせるほどの効力を持っていたとみられ，剣術流派改変に対するターニングポイントとなったとみることができる。

大村藩訪問日5月6日と24～27日と同日には，唐津藩四天流・小嶌荘太郎らの名が記されている。新太郎らが佐嘉(ママ)や鹿島から大村へ進路をとって，その後長崎へ赴き再び大村に戻ったものと考えられる。その地理的な位置や経路から，小嶌らが大村藩に滞在していたのではないかと考えられる。

大村での試合を終えると平戸，唐津，秋月と続く（練兵館, 1849, 27ウ-31ウ）。平戸藩への訪問は，史料によれば5月2日と記されているが，『芳名録』が時系列に記されていることや前後の日付や訪問地から考えて6月2日の書き誤りと推察さ

れ，新太郎らは5月24から27日まで大村藩を訪問した後，平戸へ向かい，6月5日唐津藩，そして秋月を訪問したとみられる。嘉永2年6月9日の筑前が九州最後の修行日となり，その後は長門，石見，因幡，京都，近江と帰途に着いたものと考えられる。

6．おわりに

これまで大村藩とその周辺を中心に『英名錄』と『芳名録』の史料的価値と記載内容に関する考察を進めてきた。最後に『英名錄』『芳名録』から描かれる新太郎の修行について総括したい。

（1）新太郎の修行に関する二つの史料には一般的な英名録に準じる史料としての妥当性が認められ，彼の修行における訪問地を示す史料であった。特に『芳名録』の記述の大部分が九州におけるものであった。

（2）これまで明らかにならなかった『英名錄』欠落部分は古河藩に関する記載であり，現存する史料においては古河藩が最初の訪問地とみることができる。新太郎は，北が松前（現在の北海道），南は日向（現在の宮崎県），西は対馬や平戸（現在の長崎県）におよぶ地理的に広範囲を巡った。

（3）『英名錄』には「試合」の記載がほとんどみられず，この点で『英名錄』における訪問地での稽古，試合の実態を明らかにすることはできなかった。一方，『芳名録』では「試合」の記載が顕著で，この記述がある訪問地では試合を行ったとみられる。九州北部がその主たる地域であり，新太郎は他流試合実施を主眼において修行した。

（4）新太郎の修行は地方大村藩にとっては，藩士を練兵館へ入門させたり，歓之助を招聘させたりするなど，藩の剣術流派を改変のためのターニングポイントとしての役割を持っていた。

付記

本研究は，日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費，課題番号：22・7821）の交付を受けて行われた.

注

注1）中村および富永は新太郎が嘉永2年に廻国修行で長州藩を訪問したことを述べている。

注2）平成17（2005）年9月28日筆者の聞き取り調査により斎藤幸子氏から富山県氷見市教育委員会生涯学習課に寄贈された史料であることが確認された。

注3）『英名錄』とともに斎藤幸子氏より寄贈された。

注4）国文学研究資料館所蔵の伊豆韮山江川家文書で，表紙に「弘化四丁未年二月 都下諸流試合姓名帳」と記されている。江川英龍の屋敷で行われた他流試合に関する手書きの史料であり，「練兵館社中」との奥書を持ち，練兵館門下の手合わせを示している。

注5）本稿では表紙を含めず場所，師範・門人名などが記された丁のみを頁数として数えた。便宜上，表紙を含めずに袋綴じの和紙の前半葉・後半葉の2頁を合わせて1丁とし，各丁の表を「オ」，裏を「ウ」として表記する。すなわち第3丁目の表は「3オ」，裏は「3 ウ」となる。以下，引用は特に必要とされる箇所にのみ付した。

注6）表紙・奥書を含めると 63 葉の和紙の史料であるが，『英名錄』同様に表紙・奥書は頁数に含めていない。引用箇所のナンバーリングについても『英名錄』同様の方法をとった。

注7）臼杵藩については，史料の記載者が期日を書き落としたか，未完成のまま閉じられたか，あるいは続きの史料があったが欠落してしまったかなど複数の理由が考えられる。しかし，これらを断定することはできない。史料の状態から考えるならば，史料の欠落によるものではなく，期日を書き落としたものか，未完成のまま閉じられたものとみられる。

注８）福松はこの修行について，新太郎は野原正一郎，清水牧太，山田惣次郎，細田泰次郎の４人とともに江戸を離れたとし，堀は細田，野原，山田の３人で江戸を出発して山田は松前で養子に行ったとしている（堀, 1934, p.491）。木村高士は幕末期の武者修行は同門の士や高弟を従えて遊歴していたことを述べた上で新太郎が細田，野原，山口を伴って江戸を発ち，一行が長州藩を訪れた際には山口以外の２人を従えてきたと記している（木村, 1990, p. 38）。いずれにしても複数で出立したものと考えられる。

引用文献

榎本鐘司（1983）天保ー弘化期における諸藩の剣術流派ー『弘化５年２月諸国剣家姓名録』の検討ー, 南山大学紀要『アカデミア』自然科学・保健体育編, 1: 35-42.

榎本鐘司（1987）文化文政期の西南地方における剣術他流試合の動向ー伊予史談会文庫『撃剣試合覚帳』の分析を中心にー, 南山大学紀要『アカデミア』自然科学・保健体育編, 3: 1-19.

筆者不詳（1844-1847）九葉實録巻之五十三. 大村家文書. 大村市立史料館蔵

筆者不詳（1847）都下諸流試合姓名帳 弘化四丁未年二月, 伊豆韮山江川家文書

筆者不詳（年代不詳）新撰士系録. 推定元禄―慶応年間頃. 大村藩文書. 大村市立史料館蔵

木村紀八郎（2001）剣客斎藤弥九郎伝, 鳥影社: 東京.

木村高士（1990）長州藩相伝神道無念流, 新人物往来社: 東京.

森銑三ほか編（1979）随筆百花苑, 13: 中央公論社: 東京.

長尾進（1993）近世後期における武者修行の実態についてー『宮崎長兵衛武術英名録』の分析を通してー, 風俗, 32(2): 26-44.

長尾進（1997）寛政期における剣術廻国修行の実態とその意義ー武州忍領・大原傳七郎『剣術修行帳』の分析を通してー, 明治大学教養論集, 293: 1-21.

中林信二（1994）武道のすすめ, 島津書房: 東京.

中村民雄（1994）剣道事典ー技術と文化の歴史ー, 島津書房: 東京.

小谷超（2009）斎藤新太郎（二代目弥九郎について）, 氷見市立博物館年報, 27: pp.94-82.

練兵館（1847-1849）諸州脩行英名錄 弘化四丁未年四月日, 斎藤家文書. 富山県氷見市教育委員会所蔵.

練兵館（1849）脩行中諸藩芳名録 嘉永二己酉年, 斎藤家文書. 富山県氷見市教育委員会所蔵.

斎藤福松（1939）二代目弥九郎と諸國修行, 高志人, 4(4): 63-64: 富山.

下川潮（1925）剣道の発達 再版, 大日本武徳会本部: 京都.

田端真弓・山田理恵（2011）幕末期大村藩における剣術流派改変の経緯に関する研究―嘉永７（1854）年の斎藤歓之助の招聘を中心に―, 体育学研究, 56(1): pp.143-155.

富永堅吾（1996）剣道五百年史 復刻新版, 島津書房: 東京.

和田哲也（1990）岩国藩における竹刀打込稽古の普及と他流試合の活性化について, 武道学研究, 23(1): pp.45-54.

渡邉一郎（1967）幕末関東剣術英名録の研究, 渡辺書店: 東京.

渡邉一郎（1980）武芸・修行, 日本古文書学講座 8 (Ⅲ), 雄山閣出版: 180-190.

山路彌吉（1920）臺山公事蹟, 田川誠作: 東京.

横山健堂（1943）日本武道史, 島津書房 復刻版: 東京.

全日本剣道連盟（2003）剣道の歴史, 財団法人全日本剣道連盟: 東京.

表1.『芳名録』における大村藩の流派・師範・門人

西肥
大村藩
神道無念流
原口　盛衛
門 人
吉川亀太郎
喜々津岩右衛門
山下　善吉
原口彦九郎
岩永重三郎
同藩
同流
森重百合蔵
門 人
永野清左衛門
同藩
片山流
内海　直人
門人
峰　佐代治
緒方慶四郎
河野　文吾
小佐々千三郎
同姓友之介
香取　栄
福田　与市
朝川代之允
緒方　半造
岡　四郎三郎
浅田千代治
折敷瀬数馬
岩永勝三郎
山田又三郎
針尾三十郎
一瀬伴五郎
山口　重松
荘　佳奈江
長井　兵庫
右者五月六日試合
西肥
唐津藩
四天流
小島荘太郎
右者同日試合
神陰一刀流
赤松　次郎
門人
（略）

長崎奉行支配
武信流
村井嘉作門人
（略）

西肥
大村藩
神道無念流
原口　盛衛
門人
吉川亀太郎
喜々津岩右衛門
田中　才蔵
山口幾太郎
太田邦太郎
中村　□平
廣瀬平次郎
内山甚左衛門
岩永重三郎
中村太右衛門
同藩
同流
森重百合蔵
門人
永野清左衛門
西肥
唐津藩
四天流
小島荘太郎
大村藩
印
片山流
内海　直人
門人
印　印
長井　兵庫
折敷瀬数馬
荘　佳奈江
朝川代之允
岩永勝三郎
山口　繁松
岡四郎三郎
河野　文吾
小佐々千三郎
福田　与市
小佐々友之助
緒方　半蔵
一瀬伴五郎
藤崎文太夫
森　政之允
後藤友三郎
浅田千代治
澤井善三郎
三根　百吉
香取　栄
峰　佐代治
右
五月廿四日ヨリ廿七日迄
試合

表2. 斎藤新太郎の諸国修行の訪問地（藩）・流派・師範名，門人数，その他

訪問地（藩）	流派	師範名	門人数	訪問日	試合	他藩士	押印数	備考
〔古河藩〕	〔東軍流〕	〔片山勇次郎〕	〔10〕					訪問日の記載なし
常陸笠間城藩	自現流	（村上善太夫）	ほか1					以下，弘化4年
	一刀流	山本鉄之亟　廣田屯	15	四月十三日				
常州下館城藩	示現流	（星野彦六）	ほか0					
	桂木流	高橋友衛	11	同月十五日				
下野壬生城藩	聖徳太子流	（叶間半右衛門）	0					
	神道無念流	上條信治	12	同月十六日				
野州黒羽藩寺子住	神道無念流	熊久保彌右衛門	8	同月廿三日				
奥羽白河城藩	一刀流	森元確斎	7	同月廿四日				
同藩	神道無念流	三田大六	37	同月廿八日				
奥羽會津城藩	神道精武流	井深藏人	20	五月朔日				
同藩	奇正流	黒河内傳五郎	12	同月二日				
同藩	太子流	原勝馬	18	同月三日				
同藩	真天流	酒井傳内	19	同月四日				
奥州伊達郡湯村住	神道無念流	若林謙吉	13	同月十日				
奥州半田銀山住	一刀流	藤田五郎兵衛	3	同月十一日				
同州森山住	神道無念流	（佐久間正治）	ほか1	同月十二日				
同州高子住	神道無念流	（熊坂宇右衛門）	ほか3	同月十三日				
奥州仙臺藩亙住	一刀流	一丸水之助	13	同月廿八日				
奥州石之巻住	柳剛流	岡田左馬之助	24	同月廿四日				
東奥松前藩	神道無念流	坂井厨右衛門　鎌田岡右衛門　飯田隼太	43	六月廿七日ヨリ九月十日迄				
同藩箱館住	神道無念流	（村田林八）	ほか9	八月廿七日ヨリ同廿九日迄				
同藩江差住	神道無念流	（三戸長次郎）	ほか24	九月廿六日ヨリ廿八日迄				
奥州津軽弘前城藩	小野派一刀流	須藤半兵衛　柿崎謙助	20	九月廿九日ヨリ				「廿九日ヨリ」以下の記載なし
羽州久保田城藩	直心影流	渋江内膳	9	十月十日				
羽州久保田藩湯澤住	心極流	三好九十郎	35	十月十五日				
羽州庄内鶴岡城藩	直心影流	大淵瀧之助	21	十月廿一日				
羽州最上天童城藩	直心影流	原右橘　渡邉惣藏	9	同月廿八日				
羽州最上山形城藩	鈴木派無念流	（田島岩尾）	ほか0					
	淺山一傳流	呼子貞人	19	十月晦日				
北越村上城藩	直心影流	（秋田新之亟）	ほか0					
	時中流	宮川只右衛門	16	十一月七日				
北越中村濱住	小野派一刀流	（佐藤三郎左衛門）	ほか7	同月十一日				
北越新発田城藩	直心影流	窪田鐐三郎　溝口周太	26	十一月十日				
北越水原住	神道無念流	（吾孫子信吉）	ほか11	十一月廿日				
戊酉三月								
北越新潟	鐘馗流	粕谷房之亟	6	三月朔日				以下，嘉永元年
野州縣邑住	神道無念流	（家泉柳八）	ほか2					
上州舘林城藩	直心影流	飯塚剛一郎	13	三月廿日				
豆州韮山藩	神道無念流	（八田兵助）	ほか8	七月				日にちの記載なし
駿州田中城藩	直心影流	小野小兵衛	14	七月十七日				
三州吉田城藩	山下無敵流	中澤彌兵衛	19	同月廿四日				
三州田原城藩	神道無念流	村上定平	16	八月五日ヨリ廿日迄				
三州西尾城藩	克己流	安丸仲右衛門　安丸俊治　安丸藤弥	42					
同藩	養勇流	田代藤兵衛	9	八月廿三日				
勢州津城藩	神妙流	（渡邊内膳）	ほか0					
	卜傳流	（上野小平太）	ほか0					
	真陰流	（津田武左衛門）	ほか0					
	神刀一刀流	（村上武一郎）	ほか0					
	目□流	若山栄次郎	69	九月三日ヨリ五日迄				□内は鞏（華）の文字と考えられるが定かでない
摂州大坂住御鉄砲方同心	直心影流	西小彌太	2					
信州上田藩		（尼子次郎四郎）	ほか3	九月廿二日同日				流派の記載なし
大坂浪士	鈴木派無念流	八ッ岡民部	7					
大坂玉造与力	天羽流	（朝比奈陽之助　朝比奈栄之進）	ほか0	九月廿六日同日				
大坂天満	天真一刀流	一圓番左衛門	6	十月朔日				
大坂玉造口同心	直旨流	藤重良左衛門	6					
米津越中守藩	直心影流	（鈴木渡之助）	ほか1					
玉造口御藏番		（南槌之進）	ほか1	同月二日同所				流派の記載なし
播州三日月藩	直心影流	河端老之助	16	同十二日				

作州津山城藩	理方一流	松尾圓八	32					
同藩	自勝帰真流	石垣早夫	54	於城内稽古場試合　同十六日	○			
作州勝山城藩	一刀流	鹿師村軍之助	17	同月十九日				
備中州松山城藩	直心影流派	谷三次郎	46					
豫州今治城藩	無三自現流	三好八百蔵	13	十月廿七日試合	○			
同藩	以心流	丹下喜太夫	39	同廿八日試合	○			
同藩	真貫流	冨田祐次郎	23	同廿九日試合	○			
同藩	以心得宗流	野呂完之助	28	同月晦日試合	○			
豫州松山城藩	新當流	橋本彌傳次	18	十一月三日試合	○			
豫州新谷藩	直心影流	山田八平治	9	十一月五日試合	○			
豫州宇和島城藩	田宮流	多都味嘉門	20	十一月八日試合	○			
豫州西條城藩	柳生直陰流	秦勝三郎	39					
同藩	田宮神釰流	森惣兵衛	25	十一月十八九両日				
阿州藩関邑住	貫心流	山根大蔵　山根武五郎	34	十一月廿八日				
阿州徳島城須本藩	神道無念流	三宅肇	25	十一月廿九日				
讃州藩入野山住	関口流	松村忠六	15	十二月三日				
讃州高松城藩	一刀流	上原達蔵	17	十二月五日				
讃州高松藩林田住	無相流	中條秀次郎	15	十二月七日				
備中州岡田藩	神道無念流	（中村三太左衛門）	ほか65	嘉永元年極月十八日ヨリ翌到酉正月十日				
備中州下原住	神道無念流	難波重兵衛	9	同月十日ヨリ十四日迄				以下，嘉永2年
同州川邉住	神道無念流	難波惣七	16	正月十五日ヨリ廿日迄				
備前岡山城藩	直心影流	阿部右源次	15	正月廿三日廿五日両日				
同藩	鏡心明智流	岸本鍬之助	23	同月廿四日				
同藩	小野派一刀流	笹谷武四郎	17	同月廿六日				
播州赤穂城藩	直心影流	山田彦右衛門	16	同月廿八日				
備後福山城藩	玉心琢磨流	小田切郷左衛門	9	二月三日				
同藩	無三自現流	太田藤左衛門	21	二月五日				
備後三原城藩	信抜流	荒木裕	10					
同藩	貫心流	（山品本内蔵太）	ほか9	二月廿四日				
藝州廣島城藩	貫心流	細六郎	20	二月廿七日				
防州岩國城藩	新陰流	桂六左衛門	31					
同藩	愛州神陰流	笊次郎右衛門	8					
同藩	直心影流	長谷川藤次郎	9	三月朔日				
防州徳山城藩	神道無念流	小田都筑	11	三月四日				
防州右田居住毛利筑前内	神道無念流	岡崎佐左衛門	28	三月六日				
長州府中城藩	田宮流	益田信右衛門	12	三月十日				
豊前中津城藩	一刀流	標葉甚助	14					
同藩	外他一刀流	堀美佐尾	5	三月十四日				
同藩	新當流	古宇田次郎太夫	17					
同藩	外他一刀流	坪坂何右衛門	7	三月十四日				
豊後日出城藩	直心影流	千野直右衛門	15					
同藩	東軍流	佐野次左衛門	5	三月十九日				
同州府内城藩	直指流	木戸孫九郎	12	三月廿一日				
同藩	直心影流	津久井嘉助	12	三月廿二日				
同州岡城藩	抜討流	福永傳兵衛	17					
同藩	直指流	柘植与右衛門	15	三月廿五日				
同州臼杵城藩	直心影流	（後藤郡司　河崎藤之亟）	ほか14					日付の記載なし，師範として後藤・河崎ほか4名
日州高岡	直心影流	市来武左衛門　市来善助	22	嘉永二酉四月十八日			2	
肥後人吉藩	新影流	日野熊蔵	9					
	一刀流	（那須四口介）	ほか10					
	家川念流	恒松道太郎	3					
柳河御藩	家川念流	清水太郎左衛門	5	嘉永二己酉年四月廿八日試合	○			
肥後宇土藩中	新陰流	高月五兵衛	25	嘉永二年酉年閏四月三日試合	○		2	
東肥熊本藩中	新陰流	岐部弥三左衛門	26	嘉永二年閏四月七日試合	○		3	
	新陰流	横田清馬	2		○			
	四天流	上林権兵衛	7	同日試合	○		2	
柳河藩	大石神陰流	大石七太夫	15	嘉永二年酉年閏四月九日試合	○	○		
同藩	家川念流	清水太郎左衛門	17		○			
同藩	同流	京都五六兵衛　世戸口紹兵衛	10		○			
同藩	電撃抜討流	寒田安左衛門　足達毛兵衛	3		○			
同藩	疋田豊五郎流	江嵜市兵衛	2		○			
同藩	新陰流	田尻藤太　加藤善右衛門	13	酉閏四月十一日十二日於加藤善右衛門道場試合	○		3	
久留米藩	淺山一傳流	津田傳	39	閏四月十四日試合	○	○	1	

筑米藩	神陰流	加藤田平八郎	26		○		2	
同藩	直心影流	今井静左衛門	9	嘉永二酉年□四月十六日両流試合	○			
對州藩	無双一睡流	村山東一郎	8	嘉永二閏四月廿三日試合	○			
同藩	愛洲神蔭流	青木小藤太	7	同年同月同日試合	○			
西肥蓮藩	心形刀流	富永清太夫	9	同月廿五日試合名録	○		3	
肥前佐嘉藩	タイ捨流劔術	河内軍右衛門　廣田長左衛門	13		○			
	直心影流劔術	中嶋忠右衛門	18	閏四月廿七日雌合	○			
	直心影流劔術	白濱次郎左衛門	13		○			
	鉄人流劔術	福地助之允　吉村市郎太夫	25	同廿八日雌合	○			
西肥小城藩	新陰流	鍋島邦衛	6		○	○		
同藩	戸田流	納冨五郎太夫	14		○	○	2	
同藩	大石神蔭流	江副兵部左衛門	9	嘉永己酉五月朔試合	○		3	
肥鹿藩	大石神影流	並木軍八	14	嘉永二酉五月四日鹿島導場ニ而試合	○		2	
西肥大村藩	神道無念流	原口盛衛	5		○			
同藩	神道無念流	森重百合蔵	1		○			
同藩	片山流	内海直人	20	五月六日試合	○			
西肥唐津藩	四天流	小嶌荘太郎	1	同日試合	○			
	神陰一刀流	赤松次郎	42		○	○	2	
	新陰流	大林鉄之助	ほか1		○			赤松道場での試合は大林，松江らを含んでいた
	一刀流	松江精一	1	五月十日長崎赤松稽古場ニおゐて試合	○			
長崎奉行支配	武信流	村井嘉作	7		○		2	
同	真陰流	小川水衛	2	嘉永二酉年五月十四日試合	○			
西肥大村藩	神道無念流	原口盛衛	10		○			
同藩	神道無念流	森重百合蔵	1		○			
西肥唐津藩	四天流	小島荘太郎	1		○			
大村藩	片山流劔術	内海直人	21	五月廿四日ヨリ廿七日迄試合	○		3	
肥前平藩	心形刀流	小関三七	10		○		1	
同藩	円明流	成田紋左衛門	7		○			
同藩	直心影流	井元熊太夫	4		○			
同藩	一刀流	嶌田運八	1	嘉永二酉年五月二日試合	○			
西肥唐津藩	四天流兵法	百束半左衛門	9	六月五日試合	○		2	
筑州秋月藩中	以心流	松村長太夫	8	六月九日立合	○			
同藩中	丹石流	藤田仲	34	六月九日試合	○		2	
長州藩	片山流	北川萬蔵	142	六月十六日試合	○			
長州藩	新陰流	馬木宗六	189	六月十七日試合	○		2	
長州藩	新陰流	内藤作兵衛	209		○		1	
長州藩	新陰流	平岡弥三兵衛	84	嘉永二年酉年六月十九日試合	○	○	1	
津和野藩中	江流	仁保友左衛門	20	嘉永二酉年八月十七日			2	
因州藩	神刀仌山流	浅田主計	17	嘉永二酉年八月廿八日試合	○		2	
京都二條所司代組与力	是心流	吉田兵三郎	12	嘉永二酉年九月十四日試合	○			
	直心影流	（稲田又六）	ほか0	於同所試合	○			
京都住	直心影流	戸田栄之助	24	九月十六日試合	○	○	2	
膳所藩中	直心影流	岡田東太郎	16	酉九月廿於遵義堂稽古場試合	○			

出典『英名錄』
　　『芳名録』

凡例
※翻刻は通例，縦書きにするが，多数の藩や師範名が記載されていることから，表の形式で示した。
　史料は藩名，流派，師範名，門人名，日付の順に記されているため，表は史料に準じて藩，流派，師範名，門人数，日付の順に横書きに記載した。
　表中の文字についてはできる限り史料に記載されたもので表記し，都合上「ママ」を要するところの表記を省略した。
　但し，固有名詞でない文字，「迄」は常用漢字を用い，合字の「より」は片仮名表記とした。
※師範名の記載がない場合は空欄とせず，代表者とみられる者あるいは先頭に記されているものを（　）にて記載した。
　但し，先頭の者以外で記名されている人数を「ほか○」として門人数の欄に示した。
※門人名は割愛したが，記載された人数のみ表内に記した。
※時系列に並んでいない箇所があるが，史料に記載されている順に記した。
※史料欠落部分の古河藩については〔　〕内表記とした。
※試合の記載があり，試合を行ったとみられる訪問地については最右端に○を付した。
※説明を要するものは備考欄に記載した。